

『ひっつき虫』は何故ひっ付くのか？

秋に野原、山野で遊んでいると、衣服にくっついて来る植物の種。中には中々外れない厄介者も居ますよね。

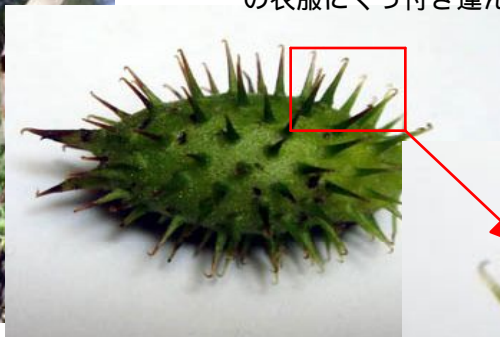
オナモミの種などは子供の頃、みんなで服にくっ付け合って遊んだものです。『ひっつき虫』と呼んでいました。

そんな『ひっつき虫』たちは何故衣服にひっ付くのでしょうか？

これは誰もが知っている『オナモミ』です ひっつき虫の代表格ですね



この鍵爪で動物の毛や、人間の衣服にくっ付き運んでもらう



オオオナモミは北米原産の帰化植物である。1929年に岡山で初報告され、以後全国に広がった。元々は農耕文化渡来とともに帰化して来たオナモミが広く生育していたが、その後このオオオナモミが優勢となり、現在ではオナモミはほとんど見られなくなってしまった。

オナモミと同じ鉤爪でひっ付くのが『ヌスビトハギ』の仲間です。



オナモミよりも小さな鉤爪がびっしりと生えています
これは『アレチノヌスビトハギ』です。



『キンミズヒキ』（バラ科キンミズヒキ属）は北海道から九州分布する多年草。山道の側など、やや自然性の高い草地に生育する。8月頃に黄色い花を咲かせ、果実の上縁には長さ3mm程度の棘がたくさんできる。棘の先端は鉤状で、これで衣服にひっつくわけである。

